

Harvard Graded Direct Method Teachers' Group News Bulletin

第 8 号 英語教授法通信 1960年6月15日

G.D.M. の発展のために



片桐ユズル

Language Research Inc.

アメリカでの体験を G.D.M. の発展にどう生かせるか、かんがえてみたい。San Francisco State College で教授法の Dr. Wilson からやかましくいわれたことは Lado, *Linguistics across Cultures*, pp. 31-32 に書いてあることであるが、英語のリズムは "phrase timed" である。たとえば

- (1) My book is on the table.
- (2) My dictionary is on the table.

My book というフレーズは2シラブルで My dictionary は5シラブルだから、シラブルをリズムの単位とするならば2倍以上の時間がかかるわけだが、英語ではおなじ時間である。ということは dictionary のよわいシラブルはすごくかるく、はやくすまされ、それに対して book はブーックと、おもく、ながく発音されるので、おなじ時間である。この時間のかけ方を、Speech の Dr. Grosevnor は、"duration" と呼んで、日本人や中国人はスタカットになるからよくない、といっていた。

G.D.M. に対する外からの批判として、発音がよわいといわれることがあるが、なんとかして、この "phrase timed" の英語のリおしえるように、意識的な努力をする必要がある。1レッスンのおわりちかくに、リズムを

専門のドリルをすることや、SEN-SIT による発言のときにも、てきとうに、拍子をとったコーラスなどいれていくことなどが、かんがえられる。ほんとは native speaker でなくてはとてもじゃない、といわずに —EP のレコードは、すぐく利用カチが一生徒ばかりでなく、教師の予習用としてある。とにかくなんらかの方法で、すくなくともリズムに対する受け入れ体制は、つくっておくべきだ。

Monterey にある有名な Army Language School をたずねたが、学校が1日8時間、語学ばかりと、うちへかえっても6時間は予習復習をしなくてはならないとか、これだけ集中して半年なり1年なりやれば、メソドのいかにかわらず、うまくなるにきまっている。同時に日本の学校ではお役所式に、どの学年にも平均した時間をわりあてているがたとえば Whitehead が *Aims of Education* でいってるような、この学年は語学に、つぎの年は理科に、というふうに集中的に片よらせてカリキュラムをくむことを、発達の心理のうえから、かんがえてみるべきではないだろうか？ これは語学だけのつごうでいっているのではない。自然科学、社会科学のもうれつな発達にもかかわらず、むかしながらの学問の分け方に固執するのはよく

Army Language School で感心したのは語学学習を三つの段階にわけて、入門期にはとくに発音に注意をはらい（もちろん文型練習のなかにおいて）、中期は文の構造に重点をおき、さいごの段階は応用の時代で、学習者の目的にしたがって vocabulary をふやし、内容本位となる。

けつきよく G.D.M. のうけいれ方についてみても、いろんな大きさに単位をとることができる。大きくは中学校から大学までの一貫した vision をもってかんがえることも必要だろうし、または中学2年のなかばで EP1 をうちきり、ふつうの教科書へうつることもある。そして一番ちいさな単位としては、そのレッスン内だけの grading と SEN-SIT のかんがえを、ふつうのリーダーの時間にもちこむ——たとえば Bulletin No. 7 に報告された川崎市川中島中学校のようなばあいがある。あらゆるレベルで同時に活躍していなくてはならない——遠大な vision がなくては、サバクのなかに頭をつっこんでしまうし、常識的なセッチュウ派がいなくては、宙にういてしまう。

また4技能についても、G.D.M. は平均してのばしていくのが本来であるが、小学生が相手だったら writing にあまり大きな要求はかけられないだろうし、高校生の復習だったら hearing, speaking と、それについて、writing であり、会社員が会話の練習につかうこともあるだろう。Shakespeare の劇を演出するのも、演出家の解釈で、力点のおきばがちがうのとおなじで、Dr. Richards のこのしごととは一種の work of art としているんなあつかい方をゆるすのが特長といえる。

USIS の映画 “Teaching English Naturally” と “Teaching English Grammar” を見て、その Philosophy of language のちがいに、うたれた。Linguistics が共時的

にのみ言語をみることは、ことばの流動性よりは、固定した約束の体系とかんがえ——てつとつて native speaker の口マネで、スピードやイントネーションもそのまま再現することにつとめ、彼自身の意志によって、えらんだり、おきかえたりする要素は、まったく排除してつくってある。それにくらべると G.D.M. は、ことばをつかうことは、metaphor をつかっていくことだ、という Dr. Richards の Philosophy of Rhetoric に立っている。だから、いつも situation の変化に応じた発言を要求する。これは、ばくの解釈だったが、体験として、ことばは、すでにきめられた約束の部分と、自分で積極的に意味をあたえていく部分、丸暗記すべき部分と、推論でいける部分、オームの部分と詩人の部分でできている。ばく自身の反省としては、オームの部分の必要性をまなんだ。しかし日本の教育全体からいうと、丸暗記の部分がまだ多すぎる気がするので、G.D.M. は creative な能力をたいせつにする意味で、英語科のワクからはみ出て、ほかの教科のいき方とばあいによっては衝突をおこさすことは、シゲキになるであろう。

それから EP の基ソとなっている Basic English は、英語のなかの、もっともアクのつよい英語的な要素をにつめたようなものであるから、Bulletin No. 6 に出された Dr. Womack の Language and Culture という問題も EP による「言語修得の過程のなかで」ドブンと、英語国民の logic, すなわち、なんでもかんでも、actor-action-goal (S-V-O) という手づきをへて見なければしょうちしない、ものの見方のちがう世界、英語国民の文化のなかへ、つけてしまう。それによって、ウヘー、ちがう人間も世界にはいるんだなあ！ という感じ、相対的世界観をおこさせれば、それが教養だと思う。

篠原佳子

わたしたちがミシガン大学で学んだのは紅葉の美しい秋と寒さの酷しい冬の四月だった。Dr. Lado が所長となっているこの The English Language Institute はこれからアメリカの大学で学ぶ外国人に8週間で oral approachによって英語を教える Intensive Course と Teacher Training Course といって英語教員に教授法やその基礎の理論を教えるのがあり私達はここで学んだ。“Phonetics and Phonemics” “Structure” “Method” “Culture” 等のコースがあった。

ここでの全体をつらぬいている構造言語学について云えば、音声の面はともかくとして生きた人間の言葉をはたして科学的、機械的に分析しきってしまったものか疑問の様な気がする。この OA の原理となっているのはよく知られている様にこの新しい構造言語学から英語及び母国語の音組織、構造、語彙等を記述分析して比較し、或る生徒達にとつての難易点をはつきりさせることにある。この前提としては学習者の母国語のいろいろな面が新しく学ぶ言語に transfer されやすいということ。これは GDM において英語の中での grading を重視するのと同様、OA では重大である。Dr. Lado の “Linguistics Across Cultures” はこの両国語の比較が外国語教育においていかに必要であるかをよく述べている。これはもちろん編集者および教師側の考慮すべきことで特別の場合以外は生徒にとりたててうんぬんする必要はない。

こうした理論が実さいにどう授業にいかされるか “method” の時間に学び又毎週 Intensive Course を見学し、或場合は TV にとってそれを見ながら皆で討論したりした。

このコースは我々の対象とは事情、環境が種々異なりこの授業形態をそのまま模倣するわけにいかないことは当然である。Drill が speedyなのは気持がよいが、よくひなんされる機械的ということは或程度免れない様な気がした。いわゆる Sen-Sit が欠けるためだろうが。

技術的面でいえば contrast の問題がある。単に英語と母国語の間ばかりでなく、英語自身の中でも、例えば発音で /s/ と /z/ を /reis/ と /reiz/ といった minimal pair の、又 function words や word-order によってあらわれる構造上の contrast 等。又このコースで目につくのは発音、構造(文法)語彙と教科書も時間も独立し、いずれの面も同様に重視されていること。私達が実さいに学校などで教える時の integrated lesson においてもこれらは個々に取り扱われる。そしてこの三つの後にくる総合的な pattern practice も一つの特徴であろう。生徒の注意を或時は内容的なことに、或時は代入する語句にとそらし、その目指している pattern を生徒が意識しなくても正確に言える様、unconscious habit となる迄練習する。これは特に production の面で有効である。ついでに言えば reception と production とはやたらに区別する必要はないが、grading 及び重点のおき方などに考慮されている。この様にして限られた語彙の中で英語の音と構造とを habit としていくことが初期の目標となる。

最後にアメリカでの GDM について。Boston でポルトガル等からの移民の子供達にこの教授法で英語を教えているクラスをいろいろ参観した。日本の子供達とは環境もちがうが、いずれのクラスも一時間内の授業が実に variety にとみ、生徒達も本当に授業を楽しんで成果をあげている様に見えた。

GDM を習ってから 3 年余り。この方法のよさである grading のハシゴも次第にはつきりして来たし、Sen-Sit もムード主義に陥らずに作れるようになって来ている。教室で応用して見てつくづく感じることは多少の準備はして行ってもいざとなるとやはり忽然として湧いてくる inspiration の方がうまく行く場合が多い。やはりその場の Situation がそれを可能にするのだと思う。とはいっても教師としては研究不足？というオシカリを受けそうだ。EP だけの situations では不足だから production drill のためにはもっと多くの教師による作られた situations が必要なのである。月例研究会に出ていて時折耳にするのが、「ここは L.E.L. だと……だ。」という言葉だ。——*Learning the English Language* 全四冊である。

そこで貯金という意味からも独りよがりの自己満足をふせぐためにも最近私は次のことに着手した。Yoshizawa's "Teacher's Hand book" と L.E.L. の Teacher's Guide との化合物を作ることである。

まず material は EP Bk1 を使うことにし Yoshizawa's Handbook を土合にして各 section 毎に ① Structure Words ② Vocabulary ③ Syntax Patterns ④ Teaching suggestions ⑤ Pronunciation & kinds of evaluation tests etc. の順で Yoshizawa's のまとめ方を守りつつ L.E.L. をこの中に混ぜて行くことにした。最初につづったのは grading のちがいであるがこれには当分目をつぶることにした。というのは今の私の関心事は teaching suggestions にあるからだ。

実際 L.E.L. の Guide を読むと、我々が殆ど常識と思っていることであついうっかりして忘れ勝ちな事までコマゴマと書かれていて親切すぎるくらいだ。次に最初の方で一例をあげて見る。

* on と off の項 (p.11) Before beginning work on the new verbs, it is useful to give some drill on the root senses—the simplest, most direct, most obvious senses—of 'on' and 'off', using objects with whose names the students are already familiar. Develop 'on' and 'off' with quick short gestures. ……Do it several times with various objects and have students do it……

* possessive pronouns …… the spoon should not too lightly be referred to as 'his'. Put it first, perhaps, in his pocket, fold his hand around it give him a wink, and then he will know that *your* isn't suddenly playing him false. Young children easily "make believe" over questions of ownership, but older persons are more readily confused if the same pencil, for instance, is used again and again as Mr. X's and as Miss B's……

……とは親切な話だ。

といった具合でともかくもまだ途中で五里ム中であるが、完成すれば非常に便利な？私自身の handbook になるし、これを片手にあちこち veterans を尋ね歩いてその見聞を書きつけて行けば一大 Handbook はなるのではないかと誇大モウ想している。

さらに、少しずつ audio-visual aids とかどんな実物をいつ持って行くかということなど付記して行きたいと思う。

Thurston Womack & Shin-ichi
Miura, *A Linguistic Approach
to English*

Structural linguistics については既に種々紹介され、なかでも主として初級英語教授に適用されたものに関しては、日本語の翻訳も数冊出ている。しかし総論的なものとしては、Harold Whitehall の *Structural Essentials of English* の翻訳の外にはまだ見当らない。米国で出た書物の多くは内容も複雑に過ぎて取りつきにくく、また値段も高いので一般向きとは言いがたい、その点この本は大変手際よくまとまっていて、phonemics から文の分析にまで及びまことに便利である。

Phonemics と morphemics の基本については、学者の考えの間にあまり大きな相異がないのであるが、syntactic structure のこととなると、学者の間に異論が多く、この方面にまで相当つき込んで述べている本書では読者に疑問をいだかせる点が出てくるわけである。ただし利口な学者達「客観的事実」のみを取りあつかうと称する学者、例えば、*Introduction to Linguistic Structures* の著者 Archibald A. Hill などを見事に問題点をさけて、全体的にまことに neat である。しかし、自分を少々気の短い実家、日本にいて英文を解釈することを教え、英語で文を書くことを指導しなければならないと考えているわたしなどは、もっとすぐに役に立ちそうなことを書いてある本がほしかった。

さて文の分析のことをもう少し考えてみると *A Short Introduction to English Grammar* を書いた James Sledd などは同書の附録 A Glossary of Grammatical Terms のなかで structural linguistics における、代表的分析法である immediate constitu-

ents にふれ、……an analysis of two works very well on some sentences and sentence parts, but it quickly encounters difficulties, even with familiar sentences…… と言って、教授上の実際の見地から最も有望と思われるこの構造成分による分析法については述べようとしないう。この点 Womack と三浦の本は、わずかの分量の中でかなり詳しく、よい意味でまことに大胆であり、实际的であろうとする善意によって自ら pioneer となり、読者を鼓舞するところが多い。もっともこの本は最近までの色々な成果を出来るだけ多くとり入れようとしたらしく、違った学者の説が少々なまのままはいり込んでいて、その間の橋わたしが不足のため、例えば構造成分(わたし immediate constituents はをこう訳したい。Paul Roberts はこれを pattern parts と言っている)についても W. Nelson Francis の *The Structure of American English* のなかの考えと、Paul Roberts の *Patterns of English* の中の方法とが混合しているように見うけられるが、これらの考えと head 対 modifier の考えとの関係など、もう少しはっきりさせてほしい気もする。しかしこういうことはむしろこの本の長所なのかもしれない。structural linguistics 中の矛盾をそのまま反映してくれていて、読者の好奇心と、探求心とを刺激してくれるところが大きい。まじめに英語の学習と教授のことを考えるものは何としても読まなければならないであろう。巻末の bibliography はまことによく選ばれているし、最近出た第二版には Trager-Smith の方法による notation の例が 11 ページにわたって示されている。室 マサル(開文社発行 ¥ 250.)

緑の目白学園訪問

5月12日、目白学園を訪問。緑に囲まれた一隅に円形校舎があった。ここで早速、中学一年担当の野津さんに話をきいた。各学年英語は週4時間、ノヅさんは1年を5クラス教えて持時間20時間(ビックリ!)教科書はEPを使わないで“Everyday English Bk I”を使ってやっているがすぐギモン文が出て来て困ったそうだ。(教科書を authority としないで勝手にかえた方がよいと意見一致)10時半から早速1年のクラス見学。生徒の注意が集中して situations に反応していた。女子ばかりのクラスで男性には別の先生がひっぱり出されたり、ヘミングウェイの絵が出たりした。This is my pen. That ball is there. の所。Name cards を使って活潑な生徒の発言が続く。唯 ‘a’ を先にやったそうで This is a my……が目立つ。や Suggestion Box

父兄にはこんな風に

ことに少しでも特殊な方法を教師が採用する場合、父兄の協力がないと効果は半分もありません。父兄に不安な気持ちを抱かせないために、こちらの方針をはっきり話して協力をもとめることが必要です。わたしはいつも入学式のあと、つきそいの父兄に次のようなことを話します。

1. この方法がどこで作られ、どういう特長をもち、これまでにどういう効果をあげているか、昔の方法と比較しながら説明する。

2. どういう本を使うか見せ、費用の概算をする。単語の数の配分とか筆記体はすぐは教えないとか、アルファベットは知ってなくてもよいとか、あまり英語について知らない人にでもわかりそうなことを話す。

3. 家庭での注意。訳をさせない。予習は

はり my, your… から導入して行くことの大切さが判った。それから例会でも指摘された点だが speaking の時生徒の発言に英語の自然な rhythm, intonation をつける点で我々は意識的でなければならないと思った。Review の時間であったせいもあって全体として teaching point がぼんやりしていたし板書も単語だけでなく文として書けば、その point を知らせるにも役立つのだが writing はこの次の時間に行なわれるのだろうと思った。色々なものを出して situations を作るにしても単調さを防ぐために場所をかえたり物をかえたり目の前においたり頭の上においたり生徒にいつも variety の感じを与えることが必要だし、それには先生の側で inspiration と創造力のある役者にならなければと後で話し合った。でもこれは岡目八目。野津さんの準備のよさ、熱心さ(彼女は反省を毎時間記録に止めている)に感心した。

(K. M.)

しなくていい。復習をよくする。発音の心配をしない。家庭教師に授業の参観をさせること。ジュクなどにいれる前に相談してほしいこと。ノートは最初の一冊は大学ノートを用いること。など。

大体の父兄はよく理解してくれて、協力を約束してくれるようです。ふつうの英習字用のノートは線の間がせますぎて、t とか d とかはっきり書けません。私は、一年生には大学ノートを持たせ、4本ごとにペンで線をひかせます。そして、大学ノートの線4本に一つの字をかかせます。大きい字なのではっきりきれいにかけるし、字をおぼえるのにも役立つし、黒板に出て書いても、あまりきたない字はかかないようです。これも先生方におすすめしたいことのひとつです。

(女子美術付属中 片桐)

○片桐、篠原両氏三月、ヒトマワリ大きくなって? 帰国。相変わらず活パツな活動ぶり。

○先日雨ヤドリついでにイコイの場ライオンで60年度会員のカードを作った。たまたま来ていたAさん、早速会費を徴収さる。

○例会報告

3月 「英語教育」に連載の Language Analysis and Language Learning について discussion. GDM 再ニンシキに得る所あり?

4月 片桐、篠原両氏の報告会。両氏とも GDM の将来と今後の研究について大いに語り我々は期待と安心感? をもつ。

5月 市島さんのクラスの小学生を使って demonstration. Mr. 片桐の phrase timed な発音に感心させられたり、市島クラスの生徒に「カワイイ……ヨクデキル」と皆ニコニコ顔。Mr. 片桐はエをカクのがうまいと客席からタメ息しきり。

○恒例になりつつある講演会も今年で第三回 4月23日杉並公民館で開かれた。アマリ天気がよすぎて? 果してウィークエンドに…と心配したが参加117名でまずまず。Miller 教授、吉沢さんの話をきいたあと川崎市川中島中学堀場さんが研究発表。志ん生のような声で演壇一パイにあふれる熱弁をふるい時々本論からはずれて皆を喜ばせた。平常の授業ぶりや、ヤヤコシク精密なカリキュラムが発表され、彼の熱意に大いなる希望と期待が寄せられた。その後映画を見て散会。

○OGDM 講習会が5月9日から吉沢さんによって例年のごとく順調に進んでいる。5月の例会にも講習会の人に参加。なごやかにデモンストレーションを見た。

○新語ナゾナゾ 赤い本? 白い本? ナゾにあらざる前者は EP1 のこと(表紙が赤い) 後者は昨年有志が作った日本人用 drill

book (表紙が白い)。コレハ新語ノケツサク。

○新年度セワ役 代表者 吉沢美穂

会計 井口喜美子 高木恵三子(西荻)

プログラム委員 長谷部米子 市島和子

升川潔 事務局 片桐ヨウコ 片桐ユズル

○Workbook の新版が、かねてうわさにきいていたが、ポケット版で出た。ちいさいのと、見本が筆記体でかいてあったり、すすんだ問題がたくさんあることなど中学生むきといえよう。いままでの大版にくらべて、はじめのあたりの問題がへっているのので、旧版はいぜんとして低学年むきの特長をもっている。

会計報告 1959年7月1日—1960年3月14日

収入 くりこし 8,538

会費 4,700

吉沢氏より 12,000

広告代 500

会場費 4,500

銀行利子 347

会計 30,585

支出 事務用品 70

通信費 4,650

交通費 2,000

印刷代 13,000

雑費 3,000

合計 22,720

くりこし 7,865

入会希望者は1年分会費200円を同封して事務局片桐まで御一報ください。

月例研究会は特に通知のないかぎり毎第3月曜日4:00—6:00p.m. ルーテル英語学校で行います。当日の会場費50円、会員以外の方も出席できます。

GDM の会員になって六年有余ですが、名ばかりの会員でしたので、子供の手がはなれたならば、本格的にこの method の勉強を始めたいと思っておりました。ところが、折よく私の住まいに近い西荻実験クラスで先生を募集していることを知り、早速応募して、お仲間入りさせていただきました。最初から一步一步自分のものにしてゆきたかったのですが、担当は特に Junior 一点ばりにさせていただきました。ところが、教えるという立場からは、Junior は必ずしも Senior より易しいとは云えず、むしろその反対なのをあらためて思いしらされました。

まず第一は、いかに生徒の興味を引きつけてゆくかの問題でした。楽しく学ぶ雰囲気をつくれるということは、すぐれた教師の資格だと思います。そして、たしかに、そうした雰囲気をつくれるかどうかは、教師の人柄によることでしょう。新米の私には、そうした魅力の持ち合わせも自信もありませんでしたので、ひとえに visual aid を利用して、魅力の不足を補おうとしたのですが、始めの授業では、思いの外それが成功したようでした。

週刊誌の表紙を貼ったり、magic ink で絵をかいたりした plates を使いました。最初の成功に安心して、次の授業で同じものを他の目的のために使うようになると、もう珍らしさがなくなって、卒直な不満を生徒達からうすのに、戸惑わされてしまいます。

これが Senior の生徒なら、同じ plate から、いろいろの問題が出ることに興味をもったかも知れません。それが Junior の段階では、常に新しい刺激を、気を配って支えてやらねばならないことがわかりました。そうした注意を少しでも怠ると、少しも遠慮せずすぐ反応を示すという Junior の恐ろしさが、今

になってよくわかったというところでは。

第二の問題は、私自身がこれまでは GDM でただその method をならっている側で、自分ではわかったつもりでも、そのわかり方が、じつは、すでに一通りの学校教育で出来た英語の理解力を基礎にしているために、子供の理解の仕方をよくわきまえていなかったことでした。また、一度教えてあるからもうわかっている筈だという事は、生徒には通用しないということを痛感させられました。

(渡辺房子)

☆西荻窪実験クラスは毎土曜日 2 時—5 時
西荻窪の東電サービスセンターでやっています。
見学歓迎。Tel. 391-6530 杉並高校片桐

Harvard Graded Direct Method Teacher's Group News Bulletin

No. 8 1960年 6 月15日発行

発行者: Harvard Graded Direct Method
Teachers' Group

編集者: 片桐ユズル

東京都北多摩郡東村山町公園久米川団地37の7

新・発売

A First Workbook of English

(新ポケット版 ¥170, 大版 ¥240)

English Through Pictures, Books

1, 2 ¥170 each

(30冊以上まとめて御注文のばあい
..... ¥ 140)

Teacher's Handbook for English

Through Pictures ¥ 360

First Steps in Reading English

..... ¥ 170

Anglophone Records for English

Thruh Pictures Series I and II

..... ¥ 5,000 each

チャールズ・E・タトル商会

東京都中央区日本橋高島屋5階
電話 千代田 (271) 9 9 2 9